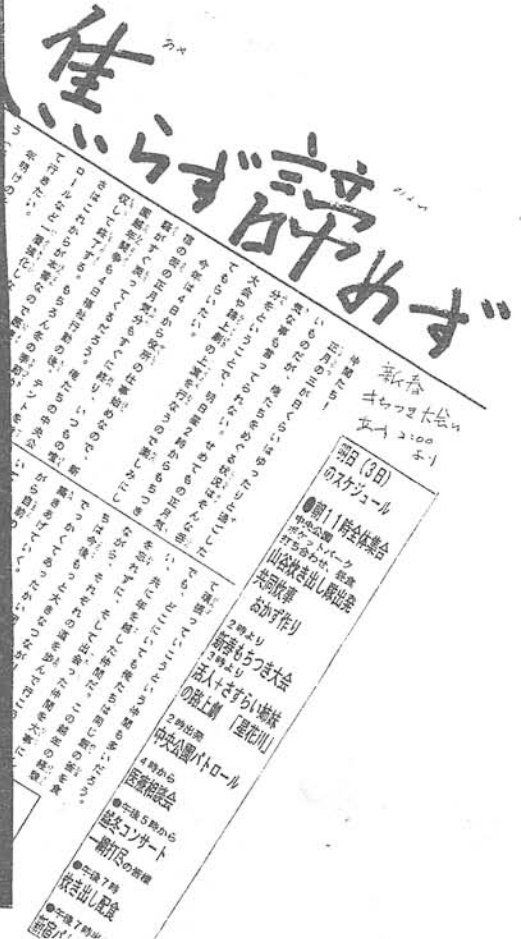
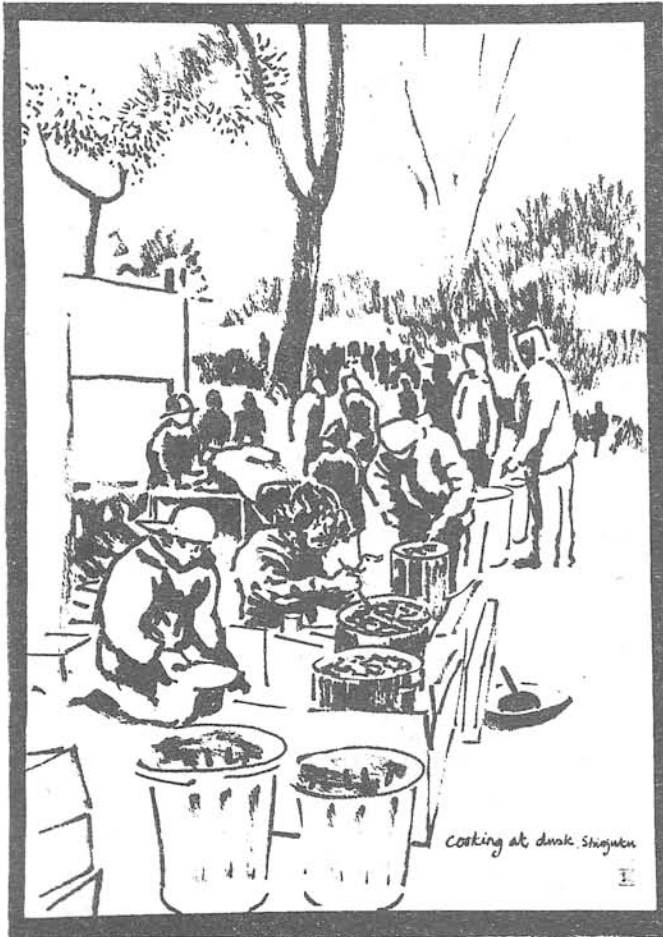


新宿連絡会NEWS vol.15 2000/2/20

新宿・池袋 1999-2000 越年特集



ついに自立支援事業開始かちとる!

頒価：200円

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議・発行

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付

TEL: 03-3876-7073/090-3818-3450 E-mail: inaba@jca.apc.org

<http://www.jca.apc.org/nojukusha/shinjuku/>

カンパ送り先：郵便振替口座 00170-1-723682 「新宿連絡会」

新宿・池袋 1999～2000 冬 越年・越冬闘争支援連帯集会基調

(1999年12月23日、日本キリスト教会館)

一、はじめに

自立支援センター早期開設、なにかんづく年内開設を求め本年も我々は全力でたたかって来た。過去最高六百名の結集でたたかった五・一新宿メーデー、全国布陣でもぎとった十・一五都庁デモ、そして全都をかけづり回った大衆行動の数々、これら我々のたたかいは、ようやくこの年の瀬を迎える十二月二十二日、特別越冬臨時宿泊事業（自立支援事業の試行実施）の開始決定、そして明日からの全都三十名の入所として結実化した。

まずは、このたたかひの成果を仲間、そして支援者の前に高らかに報告したい。

無論、東京中に散らばり、数を年々増大させている仲間の実態からすれば、この規模は明らかに少ない。そのことの批判はいくらでも出来る。が、何よりもの成果は、野宿を余儀なくされた仲間一人ひとりがこの数年来、幾人もの路上の犠牲者を目の当たりにしながらも、諦めず声が枯れんばかりに実施を求めて来た、その力が現実のものになったと言う事にある。

とりわけ、新宿闘争にとって感慨は深い。

一九九八年二月七日、西口地下広場の火災により四名の仲間を亡くし、インフォメ前拠点から自主退去を成した我々は、その移転先であった暫定自立支援センターから本格自立支援センターへの「対策」拡大を戦略化しながらも、それを成せず、暫定センターの仲間を孤立化させ続けて来た。十月末での宿泊事業への移行を許し、一月その事業も終了させてしまった。

本年十月二三日、その仲間の一人が中央公園のテントで誰にも看取られずに死亡した。

二・七の火災とは一体何だったのだろうか？二・一四の自主退去は仲間にとって何だったのだろうか？我々は路上で仲間との再

会を繰り返す度に考えつづけて来た。正しい選択という真理が譬えなくとも、我々は我々が成した事を正しい選択だと思いたかった。だから、死者と犠牲者を背負った我々は、対行政へと「対策」の拡大、なにかんづく自立支援センター要求へのめり込んで行った。我々に取って「副軸」であるべき行政闘争は運動的な「主軸」に化した。あえて我々はそうしたのである。否、そうせざるを得なかったのである。

そして、その第一歩がささやかながらスタートされる。静かにそして心深く、このことを喜びたい。

(中略)

無論、我々は三十名枠の特別臨泊（自立支援事業）を勝ち取ったなどと恥ずかしい事を言うつもりはない。我々は、これで仲間が諦めずにまだまだたたかえる！という確信を最大の成果として確認する。巨大な都行政ですら弱い立場の仲間が集い、たたかい、声を出せば突き動かすことが出来た。だったら、我々の社会的な立場も変えられる！我々を差別・蔑視し排除する社会も変えられる！

我々のたたかひは「路上生活者対策」などという用語すら存在しない時代にゼロの地点から出発した。それをここまで変えて来たのは、まぎれもなく路上の仲間の力である。我々は仲間を誰よりも信頼する。一人ひとりの肩を叩いて「これだけの力が俺たちにはあるんだ」と言って回りたい。そして、路上で散った仲間「ちょっとは安心してくれや」と伝えたい。

もちろん、これは我々にとってこれはほんの一里塚でしかない。本当の成果を確認しあえるのはまだまだ先の事であろう。路上の現実を冬を迎えますます過酷になっている。路上では仲間が苦しんで救急車で運ばれる。そして明け方になれば冷たくなっている。通行人から石や煙草を投げ込まれる。役所の窓口でさえ残酷な言葉を投げつけられる。寝場所

もすぐに奪われる。飯場に入ってもアブレ、金さえ払わぬ業者も沢山ある。旨い言葉にや裏がある。俺たちを騙そう利用しようとする連中がゴロゴロしている。野宿しててもしなくても俺たちは「社会の役立たず」と言われる。そんな中で比較的まともな仕事を探せる施設＝自立支援センターの本格開始の道がようやく拓けたに過ぎない。もちろん本格センターが出来たってこの状況が抜本的に変わるとは思わないし、そんな期待は鼻からしていない。しかし、必要なものは必要だと我々は社会に言う。言いつづけ、希望への階段を上りつづける事が我々の成果である。

二、野宿者運動としての一九九九年（略）

三、本九十九年の運動的な成果と総括

昨年から我々は全都野宿労働者統一行動実行委員会を結成し、全都各地のパトロールで仲間をつなげ、統一した運動目標に向かって共に大衆運動を進めて行く作業に着手した。野宿者の全都的な急増は、旧来の拠点を維持しているだけでは対応できない程、問題が拡散し始めた。本年東京都発表で五千八百名という野宿者の急増ぶりに、我々は昨年から先見的に切り込み、たたかって来たことは正当に評価されてしかるべきであろう。その中で、池袋の仲間の多くが全都実結集し、ほぼ独自の力で仲間を組織し抜き、今年始めて都内4番目となる池袋越年闘争に着手できるようになったのは、我々が責任をもって推し進めて来た全都実運動の大きな成果である。

新宿を中心とした開始された野宿者運動は、渋谷、池袋と独自の運動団体を年々派生させ、東京西部圏においては、運動が一極に集中することなく、それぞれ地元の運動が各地の仲間の大きな拠り所となっている。仲間にとって「仲間の命を守る」事は、一人の力では限界があり過ぎる。弱い立場の仲間同士が寄り集まって、仲間の命を支えるのが、運動組織の重要な点である。信頼に足り得る組織があれば、いざという時に力になってくれる。この安心感が、どれだけ孤立化された仲

間に取って重要かは、これこそ路上の視点に立たない限り分からない事だろう。この安心感と生きる希望を運動組織は作り出す。その意味において池袋の仲間の立上りは大きな意義を持っている。

（中略）

このように全都四番目の越冬拠点形成は、単に運動が広がった意味以上の意味をもってしているし、今後、全都実が担っている東京駅圏の仲間の組織化、また、未だ運動体がない地域への工作において教訓化しうる内容をもってしている。

我々は二・七火災で、一地域に閉じこもっている事の運動的な弊害を目の当たりに経験してきた。その運動的な総括の一つが、全都工作、全都実結成、全都大衆行動の組織化であったのである。新宿運動の地から渋谷が、そして池袋が派生的に発展している現在のダイナミックな過程は、インフォメ前ダンボール村拠点時代を越える「可能性」を満天下に示してきただろうと考える。この我々の運動的広がりが各地で分散し孤立化している仲間にどれだけの勇気と自信を植え付けたか、それは、本年の全都実大衆行動、メーデー六百三十名の史上空前の結集、そして、これら運動の成果としての特別越冬対策（自立支援事業）の年内開始へと結実化していったのである。無論我々は「対策」に風穴を開けたにすぎず、その過程が二年もの月日を経てしまった事を総括していかなければならないだろう。が、池袋のように運動を組織しよう！全都実結集して全都の仲間は自ら立上がり行動しよう！という今後の方向性の確信を強く得て来た。対行政闘争の総括をしっかりとやり抜きながら、我々は行政と同じテーブルにつくのではなく、来年も行政を震え上がらせるような大衆行動を基盤としながら、我々が必要とする施策を確実にやらせていく決意である。そして、全都の仲間の組織化その渦中でたゆみなく行ない、東京・銀座・日比谷公園など、まだ運動団体のない地域にも運動体の萌芽を早急につかみとって行きたい。

他方で我々の地盤、新宿の地ではどうだっ

たのだろうか？第五回新宿越年闘争を久し振りにほのぼのとした雰囲気で行なった我々は、我々の拠点を中央公園に定め、通年的な炊き出しを通じた仲間の寄り場、拠点形成を作り出して来た。二・七一周忌を「俺たちはこんなにも大きくなったよ」と報告し、インフォメ亡き後の新宿闘争を、かつてのようなギスギスした拠点防衛しか考えつかぬような作風を転換し、また、意識的な運動的介入を極力避けながら、仲間の自然発生性を生かすようにし、公園の中の比較的伸びやかな居住拠点を形成してきたと言えるだろう。今年の今頃を倍する中央公園のテント村は、それぞれの仲間の生活拠点として確立し、公園管理事務所も、新宿区もうかつに手が出せない程の一大拠点となっている。ここに見られる「不法占拠」への希求、すなわち居住を求める欲求を我々は正当に評価しながら、とりわけて問題がない限りにおいては自然にまかせて来た。そして、それは仲間の手により本当に大きく成長している。中央公園を拠点とした仲間の生活は、公園に多くの炊き出し団体やボランティアを集め、それらの活動にもテント村の仲間が加わりながら、いつの間にかかつてのダンボール村に等しい集住地と化して行った。

芝生広場における花見大会から暖かくなると同時に、囲碁将棋などの企画や「アルコール問題について語る会」の芝生での会合や、フリーマーケットなどの参加、炊き出し前のコンサートや映画上映など支援者を交えた様々な角度からの仲間の拠点作りは、本年の夏祭りを一週間のロングランで打ち抜く力となり、かつての一点突破闘争的な連絡会の傾向ではなく、多種多様な仲間の様々な力を引き出せる連絡会へと脱皮しつつある。またこれらの動きと連動しながら路上総合文芸雑誌「露宿」を創刊させかつては支援者まかせにしていた「路上の文化」をまだまだ一部ではあるが何れともあれ社会に発信することにも着手して来た。また、月に一度の医療相談会や毎週の日常活動福祉行動からつながる生活保護層の仲間とのつながりを、今年はさくら寮、なぎさ寮から越冬施設閉鎖後は上野

一時保護所まで面会行動を続け、他方で生活保護受給者の会「櫟の会」へと結実化させ、確実に生活保護を取った仲間の拠り所につつつある。

また、日常的なパトロールなどにおいて、西口、東口、北口、戸山公園や高田馬場の仲間との結合を日常的にはかり、全新宿地域における連絡会の存在を確固なものとして来た。仲間による仲間の運動体一新宿連絡会は、パトロール、医療福祉領域を軸とする「仲間の命を仲間を守る」行動を基盤にしなが、大衆行動による要求行動を一年通して行ない、また、それに止まることなく、仲間のあらゆる「可能性」を引き出す試みを既成の概念にとらわれずに行なって来た。

インフォメ前の屋根を失う代わりに、厳しい生活条件を強いられながらも、それを克服し新宿で生きられる様々な条件を作り出し、新たな仲間を多く加えながら、未だ全都の野宿者拠点としての新宿の地を維持している事、そして、活動の領域を狭めずに、どんどん「可能性」に向かって開かれた運動をしている事、その方向性を築きあげた事こそ、新宿の地における本年九十九年の大きな運動的な成果であろう。

(中略)

むろん、まだまだ克服すべき課題や整理しなければならない課題は大に残っている。が、かなり厳しく総括をした四回、五回の越年突入集会基調における論点(端的に言って発想の硬直化と運動体の意識性の問題)は完全に消化はしていないものの、その克服への方向性は仲間の力に導かれながら見え始めて来たと言えるだろう。すなわち、それが良いのか悪いのかはともかく我々は我々の言葉や行動で「未来」を語り始め、責任を持って来た。その居直りとも言える確信は今、我々の手にある。

我々は、一年を通して、全都実の全ての行動に責任を持ち、その大衆行動、行政交渉を内実ともに主導しながら、施策要求的に「屋根と仕事の獲得」を運動スローガンとして打ち出し自立支援センター開設要求のたたかい

を作り出して来た。その成果は、冒頭明らかにした通り、特別越冬臨時宿泊事業（自立支援事業の試行的実施）をようやく開始させ、本格建物による自立支援センター始動に向けた条件を着実につかみとって来ている。行政内部の混迷が続く中、事業年内開始を強く打ち出し、それをとにもかくにも具体的なものにした大衆運動を背景にした力は我々が誇るべき力であろう。

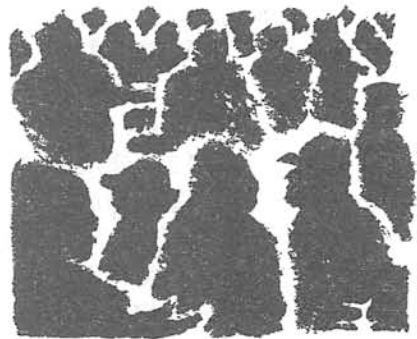
もちろん、この事業開始が「誰でも入れる」程枠がない事、雇用対策とのリンクがなされていない事、など対行政闘争的に総括しなければならない事は山ほどある。また、四月以降の事業展望と枠の拡大、そして、自立支援センターの本格的な立ち上げの展望など、我々が今後、問題にし、勝ち取っていかなければならない事も山程ある。しかし、大きな視線で見るとなれば、九十七年新宿自立支援事業開始、九十八年新宿被災者用自立支援暫定センター開設、そして九十九年全都自立支援事業試行実施開始、他方における緊急雇用対策事業（住込みによる十名の森林整備事業）の開始と、我々の「屋根と仕事」を求め運動の成果は確実に前進しており、「路上生活者対策」体系の枠内での「対策の拡大」は確実にもぎとって来ている。問題なのは、これらの対策を拡大させながら野宿者が増えている事ではなく、これらの対策を仲間が利用し難いという点にある。これらの対策を生活保護のように緊迫した仲間がすばやく利用できるようなして行く事、すなわち、我々は当面はこれらの事業枠の拡大を施策要求運動の最大のポイントとする。

この自立支援事業の試行実施への外部からの様々な批判的評価はあるであろうが、少なくともこれは我々が勝ち取ったものであり、我々が利用すべきものであり、今後の我々が望む自立支援センターの基礎とすべきものである。すなわち、我々にとってもこれは試行的実施であり、外部からの批判の立場ではなく、内部からの改善の立場に立ちながら、寮に入り事業を受ける仲間を支援、今後の事業展望を明確にしていかなければならないであろう。

また、我々は「野宿者の雇用拡大を求める署名」を新宿単独で行ない、五百七十五名分を十二月十七日、都知事に提出をした。自立支援事業枠の拡大と同時に、労働経済局などが推し進める緊急雇用対策事業などをも利用し、拡大させる方途を考えながら、自立支援事業と雇用対策を着実にリンクさせて行く方向性を打ち出さなければならないだろう。

全都大衆行動を基盤にしながら、いかに実のあるものを勝ち取って行くか？昨今の行政改革路線、福祉見直し、サービス低下という都行政、区行政の現実の中、大きな困難は予想される。だが、我々はだからと言って行政の下請けになるのではなく、また、だからと言って諦念を仲間に植え付けるのではなく、我々の手で施策を勝ち取り、我々の利用できる対策を拡大させて行く大衆的な力、そして交渉力を徹底的に研ぎ澄ませて行く。

大衆行動は社会に対する我々の存在意義である。対策の前進的にはどんなに合理的でなかろうとも、どんなにもどかしいものであろうとも、我々は我々の大衆運動を維持し、大衆運動で物事を決着させる。



四、本越年・越冬闘争の意義

今年の秋、十月十一月と戸山公園、中央公園、新宿駅で五名の仲間が相次いで亡くなった。今年の冬の厳しさは、亡くなった仲間一人ひとりが我々につきつけている。

今年東京都による概数調査においても八月都内五千八百名と過去最大の数を記録し、しかも新たに野宿を強いられる様々な仲間達が急増している。そこに長年野宿を強いられ、また生活保護など既存の対策からはじかれた疲弊した仲間が加わりと、一言で仲間と言っても様々な要因や困難を孕んだ仲間が重層的に存在している。生活スタイルも、就労の有無も含め、近年かなり野宿者層も分化してきたと考えられる。もちろん、我々は一番厳しい仲間を支え、それらの仲間を基準とする団結を作り出して行かなければならない訳だが、だからと言って比較的自力で生活できる立場の仲間を無視するという事ではない。問題なのは全ての仲間の状態を我々が把握し、野宿故に不利益を受ける事がないような我々のコミュニティ、ネットワークをより広く作り出して行くことにある。いくら自力で生活できるといながらも、困難や不幸は野宿なればいつ襲ってくるか分からない。その意味では十分不安定な状況を我々は常に強いられている訳で、この状況に野宿者層として抗して行けるつながりを形成して行く事、また我々の団結の質を比較的恵まれた仲間の一部グループとしてではなく、野宿者層全てを網羅する団結、しかも弱い立場を基準とした水平で平等な団結に化して行く事、これが越年・越冬闘争が目指さなければならない目標である。

今年の冬の厳しさとは、我々のコミュニティ、ネットワークがまだまだ広がっていない事につける。仲間の数の増加、新たな仲間の増加、複雑化した困難に、我々の側がまだまだ対応できていない状態のまま冬を迎えた事にある。いかんせん新宿の地は仲間の数が多い。我々はかなり大胆な運動をこれまで進めてきたつもりだが、他方でのきめ細かさの点ではかなり大雑把であり続けた。野宿者の運動が野宿者の現状に対応できないようでは仕方がない。その点を主体的に総括しながら、我々は五名の仲間の死に向き合いながら越冬前半期、医療・福祉行動・パトロールをより強化してきたつもりである。もちろん克服されていない点はいくらかもあるが、季節的な冬

の厳しさ、そして主体的な冬の厳しさは、十分熟知されている筈である。

仲間の命を仲間の力で守り抜こう！

パトロールで結べ！これ以上の犠牲者を出すな！

これが、今年の冬の我々の活動スローガンである。

かつて「寄せ場」の越冬闘争が防衛戦と規定されていた事があったが、もはや路上の運動は常に防衛戦の質を年中孕みながら展開されている。越冬期だから防衛戦などと言う概念を持ち出す必要性はどこにもない。防衛戦と言う問題は、越冬期だから弱い立場の仲間を支え医療・パトロール領域の活動をしていれば良いという発想であり、そのことは克服して行く必要があろう。もちろん、この必要性は絶対であり、我々が殺されないための路上の防衛線は常に引き続けなければならない。しかし、それに止まっていたのなら、越年期だけのスケジュール調整にしかならず、我々の豊かな運動は作り得ない。スケジュール化された取り組みは我々の発想を硬直化させる。仲間の団結をいかに広め、いかに仲間と共に「仲間の命を仲間の力で守り抜く」たたかいを展開していくのか、この原点的な発想に立ち返らねばならぬと昨年越冬から我々は転換し、今年もまたそれを継承する。

昨年比して我々の陣地は全都四拠点へと発展した。昨年、新宿越年と池袋越年パトロールで培って来た新宿一池袋の仲間のつながりは、今年一年の運動の蓄積においてそれぞれの越年拠点を形成するに至った。同様の種を我々は今年も撒いていかなければならないだろう。このように誰もが予想しなかった事をやりとげるのが我々の「可能性」であり、仲間の力である。「仲間の命を仲間の力で守り抜く」団結をより広く、より深く、作り出して行こうという目的意識をもった越年・越冬闘争を今年も実現させて行きたい。

(中略)

この活動の中でもっとも肝心な事は、新しい仲間の活動への参加である。そのため参加できる手段は非効率でもかまわないから、多く準備していく必要があり、また、必要だと思った事は自発的、率先してやれる雰囲気それぞれの拠点（溜まり場）で作り、多くの仲間が充実感を得られるような手作りの越年闘争を今年も目指して行きたい。

越年闘争を越年闘争として終らせず、越冬後段闘争へ越年闘争そのものの質を引継いで行く。全都越年の集約である一・一五山谷集会・デモへと突き進み、全都、全国の仲間の団結を武器に我々のたたかいを更に発展させて行こう！

五、おわりに

九十年代初頭に路上からあがった底辺下層の反逆の狼煙は、その後紆余曲折を経ながらもしかし、今やこの社会における大きな、そして特異な社会運動としての位置を確保するに至っている。バブル崩壊後の沈み切ったこの国の底辺において、最もその矛盾を背に負った人々が、立上がり、声を出し、新たな運動を作り出して来た。誰もが予想しなかつ

た事を我々は成し切り、そのつながりも全都から全国へと発展している。

我々は決して立ち止まっていない。我々は決して諦めもしない。我々は仲間が必要とすることのみを前向きに仲間と共にやって来た。我々の運動はただそれだけの運動でもある。だから、我々は九十年代が終り、二千年へと暦が変わろうとも、気負いはしまい。いつもの通り、仲間と一緒に、仲間が必要な事をやるだけである。ただ、世の中を恨み、批判し、皮肉な精神だけは保持し続けるだろう。何故なら、この「成熟した社会」と言われるこの国の底辺下層の仲間達の多くが野宿を強いられ、仕事も奪われ、社会からも排除されているからである。

最後に九十年代を総括し、去り行く九十年代のこの国にむかってこう叫ぼう。

「不法占拠」万歳！
と。

（了）

*紙面の都合により、一部割愛いたしました。ご了承ください。



越年本部より

第六回新宿越年闘争についての雑文

笠井 和明

毎年毎年、越年の時期になると唯一の持病たる胃が痛み出す。そんな新宿での越年本部長歴任が今年で早六回目。

亡きインフォメ前で試行錯誤を毎年繰り返して来た越年に慣れ親しんで来た頭と体が未だ抜け切れず、辛く楽しい思い出が詰まりに詰まったあの場の冬を思い出したたまれなくなるのも昨年からの風習。とは言いながら現実の寒さとの格闘をより具体的・戦術的に考えなければならぬのは一番辛い点。

「一人の野たれ死にも許すな」という勇ましいスローガンは我ら当の昔に捨て去り、「もう、これ以上の犠牲者を出すまい」という、何とも情けない、神に祈るが如きのスローガン。けれど、それだけ冬將軍の正体を実地において我らは認識をしてきたのかも知れない。冬という季節にどれだけの死者と出会い、どれだけの死者を野辺に送ったのだろうか？数えるのも嫌になるくらいである。つかめども、つかめども、つかめぬ藁のよう、パトロールや医療相談、福祉行動をどれだけ強化しても、毛布を大量にどれだけ散布しても、それをあざ笑うかのようにポックリと死者の知らせがいつも飛び込んで来る。路上とはそういう世界なのである。こんな事を言うとは真面目な方はお怒りになるでしょうが、希望と絶望が背中合わせにあるのが新宿の路上の冬景色なのである。勿論そんなもんさと冷静になどなれない。我らは現実を知るという怖さに只ひたすらおののくだけである。

だから、我が胃がいつも痛むのである。

越年闘争をたたかい抜いたぞ、なんて、そんな恥ずかしい言葉で我らの行為を語りたくはない。越年闘争は越冬闘争の日常活動の集中期であるだけであり、その集中期であるが

故に思想的葛藤をすこぶるせざるを得ない闘争であり、単なる年中行事のスケジュール闘争ではないからである。しかし、それを理解せずに、スケジュール闘争かのように思う人々が困ったことに来てしまうのも越年闘争なのである。やった事に充実感が得られるか？ある任務をスケジュール的に貫徹するのが好きな人々はそれは充実感が得られるであろうが、それじゃ駄目なのです、路上は。最低限のスケジュールだけで良いといつも思うのだが、スケジュールを組めば組むで硬直化して、組まなきゃ組まないで空中分解してしまう体質は一体何なのだろうかと思う。やる事は大規模だけれども、まだまだ駄目な主体です。毎年毎年支援下さる方々に実に申し訳がないと思う。

何かを説明してしまうと、人は理解してしまうのである。合理的に考えてしまうのである。それは良くないことだと思うのである。新宿の闘争は説明不足であると人々は思っている。これは誤解を生じるものであるが、けれどそれは新宿の美德であると思ったりもする。常識で考えても、たかだか六年足らずの活動しかしていない活動屋に路上の事が分かる筈があるまい。聞くだけヤボっちゃうもんですよ。だから、あまり理路整然とした言葉では説明もしたくない。感受性ですよ、とつっぱねる。そして、自分の頭で考える、考える、感じ、悩み、叫び、泣く。そうでなければ闘争なんて言う言葉、使えませんか。我が連絡会の同志達、毎年同じ事言わずにそろそろ肝に命じて下さい。

さて、さて、今年の中央公園越年はどうだったかって？説明的ではなく感想的に書く事を許してもらえれば、ずっしりとした重みが多少は感じられるようになった越年闘争ではあったと思う。細かい事を言えば多々あります。例年ながら体制の問題、意思一致の問題や様々なトラブル。もちろん、そんな事は細かくここに書くことではない。比較的暖冬という季節の好意に助けられ、また中央公園越年にも慣れ、活動も年々蓄積され

ていることもあり、結構いい加減で、けれども和気藹々とそれが調和されて、他方で原則的な活動はキチリとやりながら、ほのぼのの越年がまた出来たと言う感じである。昨年と違うのは医療テントの存在感が大きく、ここに集まる医療従事者や支援者の方々もテキパキ。おかげで我が飲み友達の多くが越年明けの福祉行動で病院に送られてしまったが、まあそれも致し方あるまい。

願わくば、あと少しの活動上のアバウトさ。まあそれは今の主体からすれば高望みであるとは思わうが…。

本部付の作業を見ている、共同炊事はいつものように、あーでもない、こーでもない。包丁裁きの達人は今年も幾人も来てくれ切り込み作業も順調、昼から深夜まで大回転の我がコック長が疲労限界な時には、酒を飲みながら副コック長二人がブツブツ言いながら補佐をしてくれと、麗しき友情も至るところで発揮。肝心の炊き出しも毎食六百食の大作業をドタバタしながら、並んじゃいけない新宿ならではの配食方法で、昨年に比して順調。「だったら並ばせた方が手っ取り早いじゃないの」というおきまりの感想が出なかったのは嬉しい限り。

企画も皆んなで思わずカウントダウンまでしてしまった年越し恒例の大宴会(?)を筆頭に、コンサートあり、映画ありと、こちらも新宿ならではの娯楽へのこだわりが多いに発揮。コンサート担当女史も「昨年よりよかった、よかった」の連発。礼金なしを承知で来てくださるミュージシャンや劇団の暖かい心は本物の路上の文化の芽を育む。

思い出を作るには辛い事だけじゃなく楽しい事も。一緒に行動してくれた仲間の多くは入れ替わったものの、仕事に行っても病院に行っても察に入っても、きっとあとでじんわりという思い出として残してくれそうな越年だったと思う。



(写真：岡田知子)

飯を作るなら旨いもの、企画をやるなら楽しいもの、皆んな仲良く励ましあって。そんな事当たり前だと言われそうだが、これが一番難しいのである。寄せ場越年闘争が培ってきた辛い厳しい越年闘争イメージを覆したい、そんな思いが我が新宿越年にはいつももある。確かに、越年は辛いものだけれども、我々が一緒に辛くなってどうしよう。「紅白くらい見たい」と言った仲間「除夜の鐘と一緒に聞けるなんて」と涙をこぼした仲間。そんな、六年前からの幾百人もの新宿で年を越した仲間の思いが積み重なって、今の新宿越年の姿はある。それは本来ほのぼのとした希望であり、安らぎである。その素直な思いに依拠しながら闘争を作る事、その思いが風化しないよう見守っていく事、これが我らの仕事である。見津毅が言った「でっかくって、暖かい団結」。これが新宿の唯一の団結形態である。

そこに居るだけでよいと思われがちな本部長のお仕事も、まあ例年色々あるので神経の摩耗戦のようなもの。居たら居たらできき使われ、ちょっとサボれば文句たれられる。年末は本当に倒れるかと思ったが意外と大丈夫だったのはアルコールと仲間の暖かな雰囲気のおかげ。感謝します。

なんだかんだと、そうやって胃痛はいつも収まる。

炊き出し班より

新たな出会いと結合の可能性

本田庄次

新宿越年闘争において、仲間の胃袋を支える活動に炊き出し班の役割があります。南千手まで電車で移動し、城北福祉センター前の山谷越冬拠点に合流、午後1時から4時過ぎくらいまでの間に、新宿の18釜、池袋の4釜、山谷の6釜の28釜の飯を炊き上げる作業を全体でおこなう活動です。米約200キロというとても多い量の飯を炊くのは並大抵ではなく、同時にどうしても欠かせない役割を担っています。

今年は山谷での労働者の陣形がしっかり整っていたため、例年のように20名以上が山谷に行く必要もなく、またセンター前の場所が狭いこともあって大人数は逆に作業がしづらいという理由から、新宿からは7～8人規模の炊き出し隊を山谷に派遣し、池袋から5名が連日山谷に赴くという形となりました。炊き出し班には、飯の調達という目的以外に2つの課題があると考えてきました。

一つは全都各地で闘われている越年闘争の中で、山谷と新宿・池袋が結合し共同作業をもって飯を炊くという一つの目的を達成することです。全都実行動で培われてきた共同行動の団結力が、仲間の命を守るという目的において試される場でもあるわけです。

これまで山谷のセンター前では、「ここは俺たちの領分、他の奴等には触れさせない」というような変な島国根性がありました。自分たちの活動に責任を持つという点ではよいのですが、それが山谷と新宿・池袋とのぶつかり合いのような格好となり、作業中に段取りをめぐる言い合いになったり、命令口調での指示に不信感を招いたり、様々な弊害があったのは事実です。これでは団結を深め仲間の命を守る闘いにはなりません。今年はそ

ういう無用有害ないがみあいを何とかなくしたい、それが念頭にありました。

この点について言えば、山谷・上野・隅田川地域での闘いの成果が、仲間のために力を合わせるという意識が活動を担う労働者に根付いてきた結果から、非常に和気あいあいとした雰囲気の中で、9日間の作業を最後までやり切れたと評価しています。おんぶに抱っここの持たれ合いの関係性ではない、地に足をしっかりとつけた運動が新たな労働者同士の関係性として作り上げられてきたと確信します。

もう一つの目的は、越年期新たに路上へと流れ出てきた「新しい仲間」に、共同作業をやろうと呼びかけ、越冬闘争陣形に吸合していくことです。飯場から放り出された仲間や、各地を転々として新宿にたまたま来た仲間など、越年期路上で命をつながざるを得ない理由は人様々ですが、「路上で年を越す」という同じ境遇に置かれた労働者が力を合わせる具体的な行動提起としての「山谷に飯を炊きに行こう」という呼びかけは、新たな出会いと結合の可能性を十分持っていると言えます。

その点で言えば、今年も新しい顔ぶれが炊き出しを担いました。同時に、中野のとある公園で一人で野宿している仲間が、毎日歩いて新宿まで来て山谷の飯炊きに参加、新宿での配食が終わったらまた徒歩で中野に戻るといった年越しを過ごした仲間もいました。仕事に行く仲間は年明け飯場に入り、中野の仲間は中野に帰りと、新しい出会いと結合がそのまま年明けにも継続されない寂しさは毎年のことですが、「全都全国にはこれだけの仲間がいる」と実感できるものは確固としてありますし、こうした一時的な関係性が何等かの形で実を結ぶことにはなるのでしょうか。何はともあれ、9日間の長丁場の炊き出しを担ってくれた仲間の意思と力に、心からこう呼びかけたいと思います。

どうもありがとう またよろしく

☆中央公園炊事班コック長・書さんインタビュー☆

Q：山谷での飯炊きと並行して、中央公園でのおかず作りが28日から3日まであったわけですが、まずこの7日間のメニューは何でしたか。

妻：カレーライスが二日、モツの煮込みも二日、あとは肉じゃが、野菜煮、ミネストローネ中華風が一日ずつだったかな。たくさん作ったから人数的には足りたよね。

Q：共同炊事はどんな感じでしたか。

妻：作業はスムーズに行ったね。野菜の切り付けだけでも10人は手伝ってくれたし。最後の仕上げは俺がやった。一番うまく行ったのはカレーライスかな。仲間がみんなカレー好きだって言うから二回やったんだけど、結構、評判よかったみたいだね。

Q：では苦労した点は？

妻：最後の二日間、プロパンがなくなって炭火にかえたことかな。あと、夕飯だけじゃなくて、深夜パト（に参加したメンバー）の食事作って、朝の（作業に参加する仲間の）食事も作って、一日三回はちょっときつかなってというのはあったけど、みんなの協力でなんとかあった。

Q：妻さんは越年何回目ですか？

妻：4回目かな。俺はいつも調理の方だよ。まあ、越年だけじゃなくて、俺は普段からそうだからね。

Q：ご苦労さまでした。今後ともよろしくお願いします。



* 絵：英国人画家ジェフ・リードさん。1999年12月～2000年2月にかけて日本に滞在し、新宿の野宿の仲間の似顔絵や越冬闘争のスケッチを描いてくれました。本冊子の絵はすべて彼の手によるものです。

パトロール班より

まだ見ぬ仲間と出会うために

星将隆

越年越冬期におけるパトロール班の活動は、新宿闘争開始以来ある「仲間の命は仲間を守る」というスローガンに示される通り、元来、野宿者自身が同じ野宿者の命を守っていくというものである。新宿におけるパトロール班体制は、積極的な仲間の力に負うものが大きい。それは病弱な仲間、流れてきた仲間に対して、医療相談や炊き出しへの参加、ドヤや病院につなげる福祉行動への参加といった情報を伝達するだけではなく、場合によっては救急車に添乗し、そしてまわりの仲間の状況、現場の状況を収集する、いわば仲間のつながりを作っていく一環としてパトロールはある。

本越年越冬闘争において、パトロール班はこのスローガンを軸としつつ、新しい仲間が常時15人から20人、10時からのパトロールに参加した。昼間の炊き出し行動から夜のパトロールに参加した仲間がほとんどである。このことは越年越冬闘争の空気作りに覆いになりえた。しかし一方では、支援（ボランティア）体制が不十分だったのは否めない事実である。事前における意思統一の未確認、支

援者の分担体制が確認できない状況の中でパトロールが行なわれたことにより、個人に負担が集中するといったことや、パトロールがその場判断、即時的なものになってしまったことが、反省すべきものとなっている。その結果、12月28日、西口地下において一人の路上死を出してしまった。情報伝達の不備、パトロールにおける状況の把握が不十分だったことが考慮されねばならないだろう。

車における拠点移動型パトロールは、大久保地域、歌舞伎町界限などで、新たな展開を示し、パトロールの情報から毛布のない女性の仲間に対して、毛布を渡し、情報を伝えた。流動する仲間、特に一度も炊き出しに来たことのない仲間に対しては、深夜パトロールでつなげていくことで、大きな意味をもった。

普段のパトロールの中で、面識のある仲間、とりわけ衰弱している仲間に関しては、医療テントに来てもらい、医師や看護婦による看護のもと、多くの仲間が自覚的にその後、病院に入った。医療班の情報のもと、パトロールで中央公園やなみだ公園（西大久保公園）の病気の仲間を医療テントにつなげられたことは、医療班とパトロール班の連絡態勢によるものが大きい。

パトロール班としては、この成果を踏まえつつ、不備な点、支援体制の強化やパトロールのやり方を考慮しつつ、仲間のパトロールへの主体的参加を呼びかけながら、後段越冬闘争にのぞんでいきたい。



医療班より

越年期活動報告

大脇甲哉

(新宿連絡会医療班)

医療班の越年活動として、1999年12月26日・30日・2000年1月3日に集中的に医療相談会を行い、12月28日から2000年1月4日まで医療テントにおいて24時間体制の活動を行った。

医療相談受診者はのべ102名であり、紹介状を20名に渡した。また症状が重篤ではなく医師による相談を希望しない人には風邪薬・胃腸薬・消毒・軟膏処置などを行い、その人数は321名だった。医療テントで保護した人はのべ18人(実数9人)、重症であり医療機関へ救急搬送を行った人が8人だった。越冬期間中に緊急入院した人は5人であり、1人は寮に緊急保護された。残念なことだが、この期間中に新宿駅構内で1人が亡くなった。

12月27・28日、1月4・5日の福祉行動の結果は入院8人、ドヤ保護1人、さくら寮入寮6人、女性施設入所1人だった。

越冬活動に参加したボランティアはのべ43名(実数16名)であり、医師5名、保健婦・看護婦4名、医科・看護学生2名、一般6名であり、ほとんどのボランティアが越年期以外に毎月第2日曜日に行っている定期医療相談活動に参加した経験があったため、特別な事前オリエンテーションを行わなくても、仕事の分担を理解しており相談活動を非常にスムーズに行うことができた。

今回の越年活動は、昨年と同様に新宿中央公園ポケットパークでの3回の医療相談会と常設医療テントを使った臨時医療相談、重症者の一時保護、衰弱した人の介護、薬の配布などを行った。また2名に対して段ボールハウスへの定期訪問活動(アルコール依存症の人に対して入院治療の説得、下肢が不自由で嘔吐・下痢がある人にお粥を運ぶ)も行っ

た。医療テントには2交代体制で医療スタッフが24時間詰め、深夜パトロール班と連携を取りながら重症者や衰弱した人をテントに受け入れた。昨年と比べ幸いなことに冷え込みが穏やかであり、ポケットパークに吹き込む風が強くなく、野宿をしている人達ばかりでなく、医療班の我々にとっても比較的過ごしやすい気候であった。また医療テントは昨年の倍の大きさのもの(12畳)を用意してもらったため、非常に活動しやすく、昨年のようにテントの外に机を出さなくともよく、すべてテント内で活動ができた。

医療相談を受けた人の内訳は、102人中33人が風邪や気管支炎など呼吸器の症状を訴え、コンクリートの上に寝たり、寒さをさける段ボールハウスなどが無く夜間歩いているため腰や腕・足の痛みを訴えた人が23人だった。足の水虫や疥癬と思われる皮膚疾患が18人、高血圧や心疾患の疑いのある人が14人だった。

投薬・処置のみ行った321人の内、155人(48%)が風邪の症状を、55人(17%)が腹痛・下痢・嘔吐などの消化器症状を訴えた。

医療テントで保護をした9人の内訳は、

- ・アルコール依存症の離脱症状及び狭心症疑い(52歳男性)
 - ・肺炎は軽快したが退院直後で泊まる場所がない(63歳女性)
 - ・肺結核治療中断(1カ月前)後再燃疑い(46歳男性)
 - ・3mの高さから転落し顔面口唇挫創(49歳男性)
 - ・肝硬変による腹水と低栄養(57歳男性)
 - ・激しい下痢と嘔吐(52歳男性)
 - ・腰痛下肢痛(47歳男性)
 - ・39.3度の発熱(49歳男性)
 - ・テンカン発作(53歳男性)
- と様々であった。

このうち結核の疑いのある46歳の男性は、12月30日未明深夜パトロールで発見され一晩保護した後救急搬送し、開放性結核であることが確認され、結核病棟を持つ病院へ入院し

た。52歳のアルコール依存症の男性と57歳の肝硬変・低栄養の男性は保護を続け1月4日福祉行動を通して入院した。63歳の女性は肺炎で入院していたが退院当日行くところが無く歩いていたところを12月30日深夜パトロールに発見され一晩保護した後、福祉事務所の当直者と電話で連絡を取り、30日寮に緊急保護された。

越年期間中の救急搬送は全部で8件であり我々が救急要請したものが6件だった。そのうち入院となったのは前述の結核で入院した人の他、4名いた。その内訳は以下の通り。

・12月29日吐血後、意識混濁の65歳男性
(救急搬送後、胃潰瘍の出血が内視鏡による止血では止めきれず、1月3日緊急手術)

- ・肺炎の67歳男性
- ・全身衰弱の72歳男性
- ・アルコール性神経炎の46歳男性

また、腰部椎間板ヘルニアの32歳男性、下肢浮腫・蜂か織炎の56歳男性、十二指腸潰瘍の51歳男性、50歳と60歳の白内障の男性が医療相談後、福祉行動を通して入院となった。越年期の入院は総合すると12人だった。

昨年と比較すると野宿者数は平均678.8人(昨年532人)で140人ほど多かったが、テント保護者数のべ18(昨年19)、救急搬送件数8(昨年7)とほぼ同数だった。



2000年1月1日午前2時頃、中央公園内で滝から転落し顔面にケガをした49歳の男性は、仲間によって医療テントに運びこまれ、医師の手当を受けた。



日	12/26	28	29	30	31	1/1	2	3	合計
スタッフ	7	2	3	8	7	3	5	8	のべ43,実数16 医師5 看護婦3 保健婦1 看護学生2,他6
テント日直	-	-	1	1	3	1	3	2	
テント当直	-	2	2	2	2	2	2	2	
医療相談	27	-	1	26	3	-	2	43	102
紹介状	3	-	0	1	0	-	-	16	20
投薬処置	15	18	58	23	82	44	26	45	321 (平均40)
テント保護	-	-	2	0	3	4	5	4	のべ18,実数9
救急搬送	-	-	2	2	1	-	2	1	8
入院・{寮}	-	-	1	1・{1}	1	-	1	1	5・{1}
死亡	-	-	1	-	-	-	-	-	1
野宿者数	680	679	(深夜パトはカウントなし)			653 (1/9:703)			678.8
配食数	800	800	800	800	800	800	800	800	

* 広く呼びかけた形の医療相談は、26日・30日・3日の3回（16時～18時）。

* 医療テントは28日16時より4日8時まで24時間態勢で対応。

越 年 期 間 中 の 入 院 者 (12名)					
入院日	年齢	性別	診断	入院先	
12月27日	32	M	両下肢筋力低下・知覚障害	12/27 長汐Hp入院「椎間板ヘルニア」	
12月29日	65	M	再度吐血・意識障害 胃潰瘍	12/29 医療センター入院、輸血、1/3 緊急手術	
12月30日	46	M	開放性結核(G7)	12/30 洗足池Hp入院	
12月31日	67	M	肺炎(肺腫瘍術後)	12/31 都立府中Hp入院	
1月 2日	72	M	全身衰弱、失禁	1/2 長汐Hp入院	
1月 4日	46	M	アルコール性神経炎、肝硬変	1/4 山川Hp入院	
1月 4日	57	M	肝硬変、腹水・低栄養	1/4 民生Hp入院	
1月 4日	56	M	両下肢浮腫、蜂か織炎	1/4 高田馬場Hp入院	
1月 5日	51	M	十二指腸潰瘍	1/5 中野共立Hp入院	
1月 7日	52	M	アルコール依存症	1/7 烏山Hp入院	
1月 9日	50	M	白内障	1/9 大久保Hp入院	
1月 9日	60	M	白内障	1/9 大久保Hp入院	

池袋より

仲間同士の信頼関係を基礎にして 本田庄次（全都実・池袋）

池袋で最初の拠点越冬が闘われました。期間は12月30日から1月3日までと最小限のものでしたが、予想をはるかに越える仲間の協力によりまずは大成功と言えます。

今回の池袋越冬は、毎週水曜日の池袋パトロールを継続して担っている全都実・池袋とふくろうの会が合同し、池袋越冬実行委を結成し取り組まれたものです。場所は駅から歩いて5分程の南池袋公園。午前11時に全体集合し、山谷飯炊き班と公園炊事班、昼間パトロール班とに分かれて夕方までの活動を展開し、午後6時に公園で配食。その後企画物を2時間程度行なって、午後8時30分から夜間パトロールに出るという毎日でした。やることは単純明解、飯炊きとパトロールで、医療的な対応が必要な仲間が出たら新宿の医療テントに移動してもらおう計画でした。当然、新宿のように班分けや任務割りをする力量などなく、全員がダンゴになって全ての活動を担う体制で臨まねばなりませんでした。

常駐の支援者はふくろうの会の2名、全都実からは夕方～夜に新宿から一名派遣するという形で、支援部分の力不足は圧倒的でした。しかしながらこの支援者不足を凌駕したのは、他でもない仲間たちの力であったことは最大の成果でした。野宿の仲間約15名が越冬の陣形に加わり、加えて池袋にあるドヤで生活保護を受給する仲間も7～8名参加、支援者も合わせれば総勢25名以上の越冬陣形が出来上がったのです。具体的な行動を提起し共にやろう、力を貸してくれと呼びかければ、これ程の仲間が結集してくれる、要は呼びかけの具体性であるとあらためて思い直し

ました。

暖かい気候に助けられ、同時に山谷の越年対策である「なぎさ寮」へと移動した仲間が約50名生まれ、越年期の池袋周辺野宿者が約140名と通常より大きく減った中での越冬は、全体的に順調に進みました。パトロールでの呼びかけも、「今日の炊き出しは来たか？」という問いから始まり、これまでのパトロールでは口の固かった仲間とじっくり話しをする機会も多く持てました。目に見える成果とまでは言えないものの、「年末年始という特別な時期」を炊き出しという回路を通じて結びつく関係性が、信頼関係を伴って形成されている確信を強く感じる事が出来ました。そうした中、66歳の高齢の仲間を掛けて公園まで連れてきてくれ、適性な対応をすることができたこともありました。仲間の命を仲間自身の力で守っていくとは、こういう小さな積み重ねの集大成でもあるわけです。

しかしながら、大成功とばかり言えない反省点もあります。

一つは池袋越冬実内部での共通意思の形成なきまま越冬に突入してしまった結果、「こんな越冬をやるつもりはなかった」という不信感を醸成してしまったことです。

今回の越冬は、ふくろうの会が計画を出し、「味噌汁と炊き込み御飯の炊き出し、昼・夜のパトロール」という「自分たちに来る最小限の越冬」というイメージから始められたものでした。しかしながらいざ越冬が始まると、山谷から大量の野菜や肉が届けられ、「旨いおかずを作ろう」という話しが労働者の中で進み、予定していなかった出費などを合意なくふくろうの会に負わせてしまうという経緯を辿っていきました。

山谷や新宿などでは「何をやってもいい、ドンドンやろう」というのが基調でもあり越冬のテーマでもあり続けています。つまり行け行けドンドン、やれば何とかなるという方式が当たり前でもあります。しかし共闘関係を結ぶ他者との関係においてこれは通用しな

いこと、全体での討議を経た合意形成の中で計画の策定や越冬そのものの目的を確定していかねばならないことを、自己反省を込めて認識しなくてはならないと考えています。

ふくろうの会の皆さんとは、現場での討議をきっかけに基本的信頼関係を回復し、共通する課題における共同行動を相互に担っていくことで確認しあっていますし、毎週水曜日のパトロールは従来以上の体制を持って継続しています。ただし終り良ければ全て良しと

はならないことをしっかりと受け止めていきたいと考えています。

残念なことに越年闘争明けの1月4日の朝、西池袋公園の植え込みの中で一人の仲間が亡くなっているところが発見されました。前日昼のパトロールで声を掛け、言葉を交わしていただけに、なんとかならなかったのかと悔しさが募ります。平子さん 享年55歳 無念追悼 池袋の闘いは彼の死をも肩に担いで進められていく。

☆池袋越冬メモ☆

12月29日 夜間パトロールで翌日からの炊き出しを呼びかける 野宿の仲間150名 約50名がなぎさ寮にむかった模様 気候も温暖 風邪ひきは多いが重症の仲間はいない正直ホッとする

30日 炊き出し初日 約80名 配食後寄り合いの予定が、ちょっとだけ話をして「団結頑張ろう！」で締め。所要時間10分 これで終わりかと拍子抜け 炊き出しは初日から「おかず」 発電機の調子が悪く電気がついたり消えたり

31日 炊き出しは100名を越える 企画の映画会は音量が小さくて全然聞こえず大失敗 寒い中で映画終了まで付き合ってくれた仲間は5名程 ミレニアムのカウントダウンはそれぞれの寝場所で 2000年到来で盛り上がった新宿と比べるとかなり寂しい

1日 炊き出しは120名 日に日に増える 明日から4釜にしよう確認 新春カラオケ大会は最初の乾杯の時だけ大いに盛り上がるが、最後は酔っ払いだけ。それでも越冬スタッフを中心に1時間半にわたり熱唱が続く パトロールはお休み

2日 炊き出し150名突破 大塚などの周辺部にも情報が伝わっている様子 映画「赤いハンカチ」(石原裕二郎)はマイクで拡声し音は聞こえるが、あまり面白くなく結局最後まで見ていたのは5人程 映画の選定を誤ったと反省会で指摘される

山谷からモツの煮込みがポリペール一杯届けられる何杯食ってもいいよと大判振るまいをするも「モツばかりそんなに食べるか」と結局半分ほど残る

3日 炊き出し最終日 約180人 続ければ続けるほど増える 配食後医療相談会 新宿に来ていただいているボランティアの医師を招いて 15名が相談 4名に紹介状 「新宿に比べると連帯感が薄いのでは。新宿だと『もっと菓をくれ』とかあつかましい人が多いが、こっちは言われるままに菓を受けとるだけちょっと心配」と医師の感想

4日 福祉行動 相談者4名 特に問題なし その最中に仲間の死の報が入りすぐ現場に飛び 近くにいた仲間から様子を聞く情報から前日その付近で座っていた仲間であることが分かる

「悔しいがこの悔しさを忘れず、これ以上の犠牲者を出さないように頑張ろう」とお疲れさん会に入る 参加20名 今さらながらの自己紹介 顔は知っているも名前を知らない仲間が多い 目の前のビールをお預けにしての反省会 それぞれ感想を述べる

「越冬お疲れさま！」で打ち上げ 賞味期限を半年以上も過ぎた差し入れのビールで乾杯 全都実・池袋の中心役一ウッチャんが繰り返した 「こんなに仲間が集まってくれて俺、本当にうれしいよ」

池袋座談会

越年活動をともにして 全都実・池袋+ふくろうの会

12月30日から1月4日まで南池袋公園で、池袋に拠点を置いたはじめての越年越冬活動を行ないました。今回はその反省と振り返りを当事者と支援者の両方のひとが集まり、ざっくばらんに、個人的な感想も含めて語り合ってもらいました。

越年活動への全般的な反省

T（ふくろうの会）：越冬を振り返ってみて、池袋で初めての試みであったこの越冬ですが、終わってみて当事者として率直な感想から聞かせて下さい。

U（全都実・池袋）：まず、成功半分、失敗半分というところかな。

T：それは……。

U：失敗というのは、命令系統がしっかりしていなかったところ。

T：団子状態ということですか？

U：そうそう。串の刺さっていない団子

（笑）。その原因は、野宿者に意図一なぜ越冬をやるのかという意図一や考えが伝わらなかったこと。成功したのは、協力してくれるひとが20人も来てくれたことかな。

T：普段パトロールとかに来ていないひととかも来てくれてましたよね。それについては。

U：うれしいよねえ。ただ命令系統がしっかりしていなかったことについては〔彼らに〕不満があったと思うし、謝らないといけないよね。

初の試みで、あれだけのひとが集まってくれば大成功だと思うしね。やっぱり一年間の積み重ねがね。俺が活動をはじめて一年でしょ……。〔越冬の手伝いに〕あれだけ集まってくれてほんとうに良かった。人数的には大成功だよね。

T：炊き出しについては。

U：〔今でも〕月に一度〔寄り合いを〕やるけれど、あれほどは集まらないよねえ。

100人程度かな、〔越冬の時みたいに〕あれほどは集まらないよね。

T：今回〔越冬の時〕は最大で250人くらいのひとが来ていましたよね。

Iさんは、越冬についてどのような感想をお持ちですか？

I（全都実・池袋）：まず第一に、ごたごたするんじゃないかなと思ったけど、案の定ごたごたして。最初に何人かで決めたこととまったく反対になってしまったこともあるし。まずは調理。みそ汁だけだったのがもつ煮とかに変わっていった。それはそれで良かったのかもしれないけれど……。

U：あれはさ、最初から予算とかをはっきりさせなかったんだよね。実はさ、あの時には、いくらっていう予算があったんだよね。公表しなかったのはごたごたすると思ってさ。

T：それは初めて聞きましたよ。問題ですよ。それでは信頼関係がつかれない。

I：ほんとう？ そうだったの？

T：誰にも話してなかったんですね。

U：そうそう。たださ、予算がこれだけあると言うと、もっとたくさん〔食材を買ったりとかに〕使ったと思うんだよね。ふくろうの会でもいくらか集まってるって言ってたからさ、「〔どうにかなるだろうし〕やっちゃえ」ってな感じでやっちゃったんだよね。

T：そういう話しは聞いてないなあ。最初に言ってほしかったですね、そういうことは。これは秘密主義ですね。新しく手伝いに来てくれたひとの食事など、予定外の事態が多すぎて……。最初に一言言ってくれれば何の問題もないのですが。

U：なぜ〔予算のことを〕言わなかったかという、手元にお金がこれだけあると知ったら、もっと乱雑な使い方になってしまっていたかもしれないんだよね。だからふくろうの会の会計を主にしてさ、その不足分を〔新宿〕連絡会に補填してもらおうと思ってね。

T：Iさん、他に言い足りないことはないですか。

I：〔炊き出しに来てくれたのが〕当初80人だったのが250人にもなったこと。それと、〔スタッフとして参加してくれた〕仲間が、自分たちと近いひとたちがたくさん集まってくれたのが良かった。あと、企画でカラオケ大会とか映画上映をやったのも良かったと思うよ。

T：映画の内容が暗かったという意見がだされていましたが。

U：……。

I：もっと笑いのあるやつの方がいいとか言われてたよね。それと、来年は餅つき大会とかしたいよね。

それぞれにとって今後の課題

T：越冬に参加した感想を、ふくろうの会の一員として個人的に述べたいと思います。実際に話し合いはしたけれども、決めた通りにならなかった。ふくろうはマイペース主義で、やれることしかやらないという所があるから、今回は越年活動の途中で急激にプレーキをかけるようなことをいってしまったわけですが。

U：いや、あのプレーキは良かったと思うんだよね。あのままだと金銭的にも収拾がつかなくなってたと思うよ。

T：「雨降って地固まる」というか、どれだけのひとが来てどれだけのことがやれるか、やってみないと分からない所がありました。

U：最初は悲壮な覚悟で越冬に臨んだわけだけど……。

T：ふくろうとしてはやってみないと分からなかった。混乱も多かったけれど。ただ今後のふくろうの活動にとって非常に良い経験になりました。とにかく続けること、「細く長く」が重要なことを改めて考えました。

池袋は、当事者支援者ともに医療の知識が少ないとお医者さんに指摘されたわけだけれど、それを今後の課題にしていけたらなと思います。

U：それはやってもらえるとありがたいよね。豊島区はこれまでワースト3に入っていたのが、それが抜け出してさ。これからは野宿者の意識改革、そんな所へ〔全都実・池袋の活動は〕向かうんじゃないかな。それを如何にして引っ張り出すか、それが一年の方針になるかな。

(まとめ：ふくろうの会)



*南池袋公園の厨房兼越年本部。屋根をかけるのに利用した支柱は、後日、公園課によって撤去されてしまった…。(写真：ふくろうの会)

越冬後段の取り組みに引き続き

あたたかにご支援をお願いします

越冬闘争への多くの方々のご支援・ご協力、本当にありがとうございました。おかげさまで何とか越年の取り組みを終了することができました。

暦の上ではもう春ですが、まだまだ寒い日が続いています。毎度毎度のお願いで恐縮ですが、引き続き三月までの越冬後段の取り組みに対するご支援をお願い申し上げます。

☆現在、特に必要なもの：米またはお米券、使い捨てカイロ、テレホンカード（入院した仲間との連絡用）、活動資金

☆資金カンパ送り先：郵便振替口座 00170-1-723682「新宿連絡会」

☆物資カンパ送り先：☎111-0021 東京都台東区日本堤1-25-11

山谷労働者福祉会館気付（着日を土日に指定していただけると幸いです）

☆お問い合わせ・連絡先：03-3876-7073/090-3818-3450（笠井）

新宿連絡会会計報告 99年12月～00年1月5日

<収入>

郵便振替カンパ	19口	83.750
郵便振替越冬カンパ	90口	899.730
通信会費	34口	164.500
露宿売上		20.500
提言売上		4.320
笠井本売上		7.500
個人・団体カンパ		99.789
越冬集会カンパ		14.500
越年カンパ		131.473
積立金		300.000

計 1.726.062

*この期間の収支 Δ 550.058

*前期負債 40.820

*残高 Δ 590.878

<支出>

米など炊事関連費	471.613
交通費	152.970
車両関連費	47.491
印刷費	81.715
コピー・DPE費	14.853
文具・図書費	12.977
発送費	63.610
倉庫家賃・水道光熱費	53.917
電話代	21.476
薬医療関連費	65.398
備品	30.653
器材購入費	104.790
毛布購入費	357.040
提言印刷費	218.268
倉庫更新料	60.000
レンタル費	121.905
池袋越年費（ふくろうの会へ）	45.064
自立支援支出	152.430
会場費	7.560
雑費	10.155
謝礼	29.630
全都実分担金	152.605

計 2.276.120